20031

血管内視鏡を用いた心房中隔欠損カテーテル治療後の閉鎖栓内膜被覆度検査を経験して

[背景・目的] 心房中隔欠損症(ASD:Atrial Septal Defect)の治療方法の一つにカテーテルによる閉鎖栓治療がある。しかし、どれくらいの期間で閉鎖栓が内膜によって被覆されるか生体内での評価は十分ではない。今回我々は、血管内視鏡を用いた閉鎖栓表面の内膜被覆度評価の検査を経験したので報告する。[対象患者・方法] 閉鎖栓治療を受けた留置 6 か月後の ASD 症例に対する閉鎖栓の内膜被覆度を半定量評価において、内視鏡光源の調整、カメラのセッティング・モニタリングに従事した。血管内視鏡カテーテルにはビジブル(インターテックメディカルズ株式会社)を用いた。内膜被覆度の評価は当院で作成された、閉鎖栓表面 9 分割 4 段階の Grade 評価表を用いた。[考察] 血管内視鏡の光源やピントの調整は通常の冠動脈評価でのモニタリング時と同様の調整で可能であった。閉鎖栓表面における内膜の被覆度、金属の露出、血栓の有無など、当院作成の評価表を用いて術者の評価を理解することができた。[結語] ASD 症例に対して閉鎖栓留置後の内膜被覆状況を血管内視鏡を用いて観察し、閉鎖栓表面を視覚的に確認することができた。術者による閉鎖栓表面の評価は瞬間的な評価となるため、血管内視鏡の光源やピントなどの調整および設定の共有は重要であった。また、内膜被覆度の判定は半定量評価であるため、術者だけでなくコメディカルにも他のイメージングデバイスと同様に評価に精通する必要がある。